慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 麻生久伝刊行委員会 麻生久伝 |
| Sub Title | |
| Author | 飯田, 鼎 |
| Publisher | 慶應義塾経済学会 |
| Publication year | 1959 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.52, No.9 (1959. 9) ,p.803(55)- 810(62) |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19590901-0055 |
| Abstract | |
| Notes | 書評及び紹介 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19590901-0055 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

つ急速に「桎梏」と化して行くのである。この故に「合理化」と「魔術からの解放」とを最も徹底的に行なったこのピューリタン的誓約団体の歴史的意義を想うべきではないだろうか。かくの如くタウンの「共同体的規制」の楯の裏面をなし、しかも歴史構成的には決定的意義をもったその共同性――至高のヤーヴェの「予定」の前に畏れと孤独を以て立ちつつ、相互に比類なき人格の独立性を獲得したカルヴィニスト相互間の社会連帯性の世界史的高さを、タウンの社会経済制度のうちにそれを貫くものとして読みとらなければ、機械的な経済学的対比に終るのではないだろうか。（第一篇、三、二九―三三頁の観点は第二篇では薄れている。なお二五九頁参照。）

(b) 一八世紀に入ると間もなく現われるタウンの不在所有は、特にニュー・イングランド西部の「ニュー・タウン」に多く見られるが、そこに於て「寄生地主＝小作関係を形成した」といわれる意味如何。ヨーロッパ経済史でいう様な或る段階を想定していっているのであろうか（一六一―一七四頁。二八頁及び註(5)）。（主に「投機傾斜した」事には筆者も同意する。）又タウン内部の所有権者の土地集積と雖も、必ずしも民富の形成に直結するとはいえないのではないか（一七三―一七四頁）。一定の条件と段階下に於てのみ民富の形成に帰結する事は、タウン内部のロイヤリストがどの様な条件下に現われたかを思えば明白であろう。

(c) 農村工業について。タウン内部の社会的分業のあり方を示す資料は、現状では甚だしく不足し、若干の研究書・地方史等に散見される程度である。トライオンやブライデンバウの著に見られる課税台帳による職業別人口構成は僅かな例である。平出氏の場合は、列挙された手工業の種類と人数が余りに長期間（セイレムでは六〇―七〇年間、ニューベリでは六五年間、イプスウィッチの如きは一世紀近い期間）に亙る為に、その実証性は甚だ低いと見なければならぬ。この点について、先に述べたタウン文書の研究が恐らくヨリ適確な資料を提供するのではないかと思われる。それ故社会的分業のあり方は今後の我々の研究の課題となるであろう。序ながら、ニュー・イングランドでは、イギリスの様な著しい不均等発展が見られない様なのであるが（実はこの点も今後一層実証されねばならないのであるが）、もし然りとすれば何故なのであろうか、という問題をここで提出しておきたい。

(d) 流通行程の分析にしても、例えば農村店舗主や巡回商人の営みやその機構的・段階的意義は充分具体性を与えられていないし、農民層の分解（二四九頁以下）は殆んどすべて今後に残されている。

以上により明らかである様に、産業資本の展開過程の構造的分析は、異なった年代と地域の史実を抽出する方法――現在の段階では資料上真に止むを得なかったのであるが――によっては不可能なのである。我々は、一定の年代と地域の資料を出来る丈まとまった形で、即ち農業・工業・商業・人口・教会関係の諸資料、個々の経営文書、各種の公文書などを一括して分析せねばならない。而して聯



関（隣接・母娘等）のあるタウンをあわせて分析出来れば好都合であり、更に一八二〇年以降明確に分化して行く丘陵地・低地・工業の三つの類型のタウンから夫々いくつかのタウンを上記の方法で分析出来れば、研究のレベルは一層高められるであろうと思われる。

(三) 第三篇「アメリカにおける保護関税の成立」は、保護関税を単にそれとしてではなく、全経済発展のうちに位置づけて理解しようとしている。ここで、ハミルトンの政策乃至フェデラリズムとは何か、或いはその支持者達＝フェデラリストとはどの様な階級か、特にボストン・アソシエイツの歴史的性格、そしてボストン商業資本の綿工場設立と農村工業の自主的展開といういくつかの問題が根柢にある事は指摘する迄もない事である。この際我々は、個々の人間・企業・産業・地域等に視野を限る事なく、アメリカの近代化過程への見透しに於て考察し位置づける事に特に留意したい。

最後に、以上書評というよりは感想に近い文章を書いて来たが、ともあれ本書は戦前の鈴木圭介氏の研究（同氏の「アメリカ経済史研究序説」日本評論社刊）とならぶ、戦後の最善の成果であるといってよいであろう。理論的にも実証的にも、更に又表現にも、異論なり不満な点は少なくないが、とにかく同種の研究をぬきんでて居り、短期間にこれだけの成果を世に送られた氏の精力的な活動に深い敬意を払いたい。戦後の安易なアメリカ民主主義謳歌論乃至文化センター的アメリカ史学がどうやら凋落しつつある今日、この様な



着実に根を下した研究を見出す事の出来た事を同学の者と共に喜びとしたい。終りに著者の御健康と一層の御研鑽を心から祈りたいと思う。（日本評論新社、本文三五九頁、七八〇円）

（中村　勝己）

---

麻生久伝刊行委員会

## 『麻生久伝』

「もし米ソ間に全面的な核戦争が起ったとしたらどうなるか」、この深刻な問題を討議したアメリカ合衆国上下両院合同原子力委員会の公聴会なるものが終ったが、これによると、米国の重要都市、原子力施設、軍事基地など二二四ヵ所の目標にたいして、二六三発の水爆が投下されるとした場合、米国はこの水爆戦で五〇〇〇万人もの死者を出し、二〇〇〇万人もが負傷するという結論が出された。しかしこれは「中程度の核攻撃」ということが前提となっており、敵水爆の二五％が目標に命中し、五〇％が目標周辺におちるが、あとは命中を免れるという条件での、いわばうちわの被害予想である（六月二七日、朝日新聞夕刊、同月三〇日朝刊、社説参照）。

おどろくべきことは、このような戦慄すべき証言にもかかわらず、公聴会で多くの証言者たちが、「米国は核戦争に生き残れる」と

証言していることである。七〇〇〇万人といえば、米国総人口一億七〇〇〇万人の約四〇%強である。ほとんど二人に一人が死にもしくは負傷し、しかも他の一人さえも原爆後遺症などによって安全でありえないような残酷な情景が予想されるにもかかわらず、「米国は核戦争に生き残れる」と信じ、生き残るためには防衛の努力が必要であり、退避所をつくったり、食糧を蓄えたりすることの必要性が叫ばれ、また米国民がこれをまともにうけいれているとすれば、米国はたしかに狂っており、まさしく「病めるアメリカ」である。少なくとも現在のアメリカの為政者たちがバケツ・リレーによって空襲の惨禍からまぬがれることができ、「一億特攻」、「一億玉砕」によって、「万邦無比の国体」を護持することができると信じていたかつての日本のドン・キホーテ的軍国主義者たちと同じような危険な心理状態、末期的な精神状態にあることは否定できない。もちろんわれわれは、腐敗したアメリカの支配層の気狂いじみた思想や政策にもかかわらず、アメリカ人民のなかに、人間的自由と人格的平等とを基調とする独立宣言の精神が脈々として流れているかぎり、世界を破滅におとしいれるような大規模な核戦争が、いまただちにわれわれを襲うとは考えない。けれども、問題は、アメリカにとって「反共の防波堤」としての役割をはたしているわれわれの祖国が、本格的な核武装にのり出すようなことがあれば、原水爆戦争の危険は一層増大するという事実であって、アメリカ政府の政策をして、原水爆戦争の方向に志向せしめる重大な契機を、わが国の政治の将来がつくり出すことは、充分予想されるところである。

自民党政府は、口を開けば中立主義は空論であるときめつけ、安全保障条約の改正を急いでいるが、これは実に対米従属を一層深め、われわれをして、再び戦争という自殺行為、しかも何人も生き残ることをゆるされない絶滅戦争の方向へ駆りたてることになるのではないだろうか。明治以来日本が経験したすべての戦争はつねに祖国防衛の美名のもとに企図された侵略戦争であった。日露戦争をもって防衛戦争とする人もあるが、これは明らかに間違っている。この戦争が、主として他国の領土で、他民族の犠牲の上にしかもその権益を奪うために遂行されたという点で、もはやその帝国主義戦争としての性格は、かくすべくもない。第一次世界大戦はもちろん、一九三一年の満州事変から一九三七年の日華戦争、そして太平洋戦争にいたる一連の侵略戦争は、日本の支配者、軍国主義者たちによって、勤労者大衆のまったくあずかり知らぬ形で、勝手におしすすめられ、気がついたときには時すでにおそく、国民は破滅の淵に立たされていたのであった。いまもし、日米安全保障条約がその撤廃の方向へではなく、その改定、すなわちアメリカにたいするわが国の独立性のより一層の喪失、従属の再編成の方向へ進むならば、われわれは、わが国の軍国主義化、ファシズム体制への傾斜、従って歴史的経験が示すように、勤労者大衆が支配者の一方的な独断によって、アメリカの傭兵として火中に栗を拾う体制にひきずりこまれる危険性を、もっとも深く憂えそしてこれを警戒しなければならない。



このような認識に立つならば、われわれは、わが国の民主主義運動が、いかに無力化され、壊滅させられていったかを更めて想い起さなければならない。とくに労働運動や社会主義運動の場合、国家権力の徹底的な弾圧のなかで、大衆も指導者も活路を求めて必死に苦悶し懊悩しつつも、ついに天皇制ファシズムの前に膝を屈し、侵略戦争に協力を強いられていった屈辱の歴史を読むとき、深い悔恨を覚えずにはいられないであろう。ここにとりあげた「麻生久伝」は、その意味で、ひとりの指導者の歩みを通じて、日本労働運動の敗北の過程を興味深く示唆すると同時に、彼自身、日本の社会民主主義運動の悲劇的性格を代表的に体現した人物として、日本の民主主義運動に関心をよせる人々にとって、顧みるべき多くのものを暗示しているといえよう。

＊　＊　＊　＊

本書の巻頭には、河上丈太郎、木村毅両氏の序文がかかげられ、第一篇　革命と社会主義、第二篇　政治闘争の激流、からなり、第一篇の内容は、第一章夜明け前の先駆、第二章現代日本の黎明、第三章階級闘争の激浪、第四章鉱山運動の伝統、第五章革命の影と現実、の諸章から成っている。また第二篇は、第一章無産政党の四分五裂、第二章日本労農党と統一主義、第三章暴圧の激流に統一は進む、第四章社会大衆党と麻生久、附録　麻生久遺文選集となっている。

目次から明らかなように、第一篇は麻生久個人の伝記的考察を主としてとりあつかい、その生い立ち、思想的な遍歴、労働組合運動の実践などに、できるだけくわしくふれているのに反し、第二篇の方は、第一次世界大戦後の民主主義運動や社会主義運動の昂揚を背景として復活した労働組合運動の発展、分裂、そして国家権力による不当な弾圧に抗して結成された無産政党内部の諸矛盾――イデオロギー的分裂とその崩壊そしてファッショ化――のひろがりゆく過程の分析に主として力点が注がれ、麻生久を大正末期から昭和十五年その死に至るまでの日本労働運動の目まぐるしい変転の歴史のなかにとらえ、その役割を正しく評価しようと努力している。

麻生久は、明治二十四年五月二四日、大分県玖珠郡東飯田村に、地主麻生良策の次男として生れた。彼の少年時代および青年時代は、日清・日露の両大戦を中心とする資本主義の確立と発展にともない日本の政治が中国および朝鮮にたいする帝国主義的膨脹政策の方向に次第に動きつつあった時期に相当する。雄大な自然に囲まれて育った彼は、日露戦争がはじまった明治三十七年草深い故郷玖珠盆地を離れて大分中学に入学したが、やがて校長排斥のストライキの先頭に立つ反逆児に成長した。明治四十三年第三高等学校に入学し、大正六年東京帝国大学仏文科を卒業したが、日本の社会主義運動にとって「冬の時代」と呼ばれたこの時期に、彼は、深刻な内面的苦悶を体験し、またそれを通じて彼の思想形成がなしとげられたのであった。

大逆事件を契機とする無政府主義者にたいする酷烈な弾圧によって、社会主義運動が壊滅的な打撃をうけたため、労働組合運動は、

鈴木文治の友愛会にみられるような労資協調的相互扶助的な運動のなかに、辛うじてその命脈を長らえていたにすぎなかった。この時代は、日本資本主義の矛盾がようやく貧富の対立や新旧両思想の葛藤などとなって露呈され、知識階級の間には、たとえば夏目漱石の文学に見られるような頽廃的な空気がひ満しはじめ、社会的政治的な雰囲気としては、石川啄木も云っているように、「時代はまさに閉塞の現状」に喘いでいたのである。麻生久は、当時の青年の間に風靡したロシア文学に陶酔し、とくにトルストイやツルゲネフから大きな思想的感化をうけながらも、そのヒューマニズムと理想主義と現実の肉慾との矛盾に苦悩した。トルストイ流の理想主義に徹底しきれず、さりとてまた東京帝国大学に官僚的立身出世主義と偽善しか見出しえなかった彼は、大学に絶望し、懐疑と虚無におそわれ、良心にさいなまれながらも、柳暗の巷に出入して、遊里の女と情交した。社会運動家としての、理想主義とも現実主義ともつかない彼の不徹底なむしろ虚無的な態度は、彼の生涯を通じての弱点であり、まさにこの青春の彷徨に発するのではないだろうか。

だが一九一七年、ロシアにおけるボルシェヴィキ革命の勃発は、この懐疑的な青年をして社会主義運動に挺身させる動機となった。すなわちすでに吉野作造博士はその民本主義をひっさげて、軍閥官僚の専制政府にはげしい批判をあびせ言論界に大きな影響をあたえていたが、ロシア革命の勃発と第一次世界大戦末期に突如としておこった米騒動などによって、大逆事件以来一時はほとんど窒息せしめられていた社会主義や労働問題は、再び脚光をあびてジャーナリズムに登場した。それと同時に、いままで労資協調・階級調和的な扮飾をまとっていた友愛会は、次第に階級闘争的な戦術をとりいれるに至り、労働組合運動は、ようやくその本格的な発展を示すに至った。彼は友愛会の活動を通じて鈴木文治や野坂参三、北沢新次郎と相識り、のちに社会問題研究会とその名を改めたけれども、大正七年六月、青年と労働者による社会問題の共同研究機関として、労学会を組織し、また同志棚橋小虎等とともに水曜会という社会主義研究団体をつくったりした。

ロシア革命がいかに大きな影響を彼にあたえたか、「ボルシェヴィズムと露西亜の国民性」と題する論文の一節には、つぎのように書かれている。

「レーニンによって代表されるボルシェヴィキの最も偉大な点は、そのなかに不撓不屈なる鉄の如き思想、臨機応変の策戦、大胆率直な突進力、而かも必勝の確信と捨身の行動であった。これらは単なる理論の上からは生れてこない。レーニンをはじめとするボルシェヴィキの指導者の人間的本質の問題がある……」（八三頁）。

彼が、レーニンの戦術戦略に傾倒したことは疑いえない。しかし彼は、指導者レーニンの行動的な機敏さにのみ模範を求めたけれども、マルクス・レーニン主義の偉大さに感銘し、この理論を体得することを好まなかった。理論的把握の欠如！　ここに彼をして晩年



にはついにファシズムに迎合させる要素があった。

ボルシェヴィキ革命から米騒動、そして吉野作造博士の、右翼的国家主義的団体浪人会との言論戦の勝利までの時期は、いわゆる「大正デモクラシー」の頂点であり、日本の人民大衆は、民主主義運動史上における短い黄金時代を享受した。吉野博士が浪人会との立会演説において圧倒的な勝利をおさめた直後、麻生久は、吉野作造と福田徳三にはかって、大衆的啓蒙団体「黎明会」をおこしたのであった。日本の民主主義運動に不滅の足跡をのこした黎明会は、大正七年十二月二三日神田学士会館において創立総会を催したが、その綱領はつぎのような三ヵ条から成っていた。

一、日本の国本を学理的に闡明し、世界人文の発達における日本の使命を発揮すること。

二、世界の大勢に逆行する危険な頑冥思想を撲滅すること。

三、戦後世界の新情勢に順応して、国民生活の安固充実を促進すること。

この黎明会が、当時のすぐれた頭脳をいかに網羅していたか、たとえば会員のなかには、新渡戸稲造、穂積重遠、大山郁夫、渡辺銕蔵、吉野作造、高橋誠一郎、福田徳三、朝永三十郎、阿部秀助、麻生久、左右田喜一郎、森戸辰男、堀江帰一、大河内正敏、与謝野晶子、上田貞次郎、桑木厳翼、小泉信三、佐々木惣一、三辺金蔵、北沢新次郎などの人々を擁して、頑迷にして反動的な思想と闘ったのであった。黎明会が果した功績のうち、右翼主義者の神がかり的天皇中心思想にたいする批判、軍国主義批判、国際労働会議における日本政府の態度の批判、治安警察法第十七条撤廃問題や森戸事件の批判などは、今日あらためて評価されるべき問題であるが、このようなデモクラシーの運動のもり上るなかで、麻生久は、一方において雑誌「解放」の編集を通じて、堺利彦や山川均、大山郁夫などの社会主義者と接触するとともに、のちに日本の社会主義運動に指導的な役割を果した多くの人々を輩出せしめた東大の新人会を応援した。新人会は、その綱領として、

一、吾徒は世界の文化的大勢、人類解放の新気運に協調しこれが促進に努む

一、吾徒は現代日本の正当なる改造運動に従う

の二ヵ条をかかげ、波多野鼎、赤松克麿、平貞蔵、新明正道、三輪寿壮、嘉治隆一、林要、蠟山政道、石浜知行、住谷悦治、風早八十二等が初期の会員であった。長い間、官吏の養成所、特権階級の附属物であった東京帝国大学に新思想の団体ができたことは、世間に大きな衝動をあたえた。知識階級の間に、こうして民主主義、社会主義による新思想の運動が澎湃としておこりつつあった頃、労働組合もまた大戦中の好景気の波にのって続々として建設され、大正九年から十年にかけては、労働組合運動は社会改良主義を脱して社会主義に支配されるに至った。かくして大正八年、友愛会は、その組織上三つの改革を断行した。すなわち

一、従来の一般的地域組合を、漸次、職業別、産業別の全国組合に

整理再組織すること、新しく鉱山部を設ける。
二、友愛会の名称を大日本労働総同盟友愛会（大日本の大は、つぎの大正九年度の大会で、帝国主義の臭いがするというので撤去し、翌十年友愛会をも削除した。）
三、会長の独裁制を廃止して理事の会議制とし、理事の選出の基準を定めたこと。

日本における最初の労働組合の単一組織としての総同盟は、その後大正十四年の分裂にいたるまで、労働組合運動の中核的な組織として、八時間労働制、男女同一労働同一賃金、普通選挙権などを要求しつづけた。その間麻生久は、棚橋等とともに、鉱山労働運動、とくに日立鉱山および足尾における坑夫たちの運動を指導し、今迄かえりみられなかった鉱山労働者の運動に画期的な業績をうちたてたのであった。彼が鉱山労働運動にいかに熱烈な関心をいだき、またこれに没頭したかは、本書におさめられている遺稿鉱山運動小史に明らかである（二一一―二三三）。

しかしながら、階級協調主義をかなぐりすて戦闘的な労働組合として脱皮した日本労働総同盟は、ロシア革命の影響や米騒動などの階級闘争の熾烈化、未曽有のストライキの嵐（もっともはげしかった大正十年、組合数は三〇〇、ストライキ件数は二四六、参加人員は五八、二二五人に達した……末弘厳太郎「日本労働運動史」による）のなかに、未だ確固たる基礎をかためる余裕もないままに次第に革命的思想の激浪に大きく揺り動かされるに至った。すなわち大正十年から十一年にかけて、いわゆるアナ・ボル論争と呼ばれたアナーキズムの直接行動論（大杉栄）とコミンテルンの指導する共産主義者（堺利彦、山川均、荒畑寒村）との理論的対立であって、この結果は、労働運動にも大きな影響をあたえ、分裂的傾向を促進した。



しかも大正十二年六月の共産党員の一斉検挙と、それにつづく関東大震災後の無政府主義者および革命的労働者の虐殺によって、労働組合運動における左翼勢力は凋落し、それ以後、総同盟内部には右翼的勢力が抬頭し、日本の労働運動は、次第に分裂的傾向をたどるようになった。すなわち大正十三年頃から社会改良主義的労働組合主義の上に立つ松岡駒吉、西尾末広、赤松克麿の勢力が主流をなし、渡辺政之輔、山本懸蔵、杉浦啓一等の共産主義者が対立するようになり、翌十四年左右両派の対立抗争はその頂点に達し、ついに労働総同盟全国大会において、三五組合、組合員一三、〇〇〇名を有する総同盟と、より左翼的な、主として共産主義の影響のもとに結成された日本労働組合評議会は、三二組合、組合員一二、〇〇〇名を擁して労働戦線は二つに分裂した。

この間、麻生久は単一無産政党結成のために努力していた。しかし左翼との統一をあくまで拒否した総同盟派は、評議会の指導下にあった日本農民組合の加入を理由として、折角成立した労働農民党を脱退し分裂させた。労働農民党を脱退した総同盟派は、大正十四年十一月二〇日、共産主義に反対する社会民主主義政党としての社会民衆党の結成準備を急いでいたが、このとき麻生は突如日本労農党を結成して総同盟派をおどろかした。けだし農民の力を無視して単一無産政党の成功はありえないことを知った彼は、全国の農民組織としての日本農民組合を、左翼的な評議会のもとからひきはなそうとしたのであった。

かくして単一無産政党の夢はここに破れ、労働農民党、社会民衆党そして日本労農党の三政党が、左派、右派そして中間派としてそれぞれ鼎立の状態となり、その結果、麻生は左右両者の挟撃にあわねばならなかった。しかし労働組合運動における中間的立場は結局日和見主義に通ずる。やがて三・一五事件および四・一六事件にみられた共産党員もしくはその同調者の一斉検挙は、左翼勢力をいちじるしく弱めるとともに、日本共産党はまったく地下にもぐった。そして満州事変以後、労働運動も圧倒的に右翼社会民主主義者の力が強くなり、それはついに昭和七年の社会大衆党の成立に至ってますます明白となった。本書の著者は、社会大衆党の結成をもって、国家主義的右翼の結成であるとする批判を根拠なきものとして否定し、「封建的警察政治の弾圧とファシズムにも劣らぬ日本の軍国主義の憲兵政治の狂暴なる弾圧の下に、なお公然と支配権力に向って展開されたこの期における社会主義の闘争は、単なる教条的理論や実践の外なる第三者的批判によって片付けるには、余りにも多くの重要な実際的諸問題を含んでいる」とのべている（四五二頁）。あるいはそうかもしれない。しかしそれならばなぜ社会大衆党は、麻生久の指導のもとに天皇制軍国主義と結びついたのか。ここに右翼社会民主主義者の反動的性格がひそんでいる。著者は云う。「麻生は根本においては、日本の革命は軍部勢力と無産階級との結びつき、天皇勢力と庶民勢力との結合で行われると信じていた。従って、それには軍部と結ぶことを考え、後には近衛文麿と結ぶことを考えた。麻生の胸に描いた日本の革新とは、明治維新の革命の現代版であった」（四五七頁）と。だがわれわれはこの矛盾した説明に満足することはできない。むしろ日本の社会民主主義の性格的な弱さ（従って社会民主主義一般の！）の証左をみるのみである。

大正の初期、トルストイやツルゲネフの思想にみちびかれつつ無産階級運動に没頭した若き日の麻生久の眼には、天皇や軍部は少なくとも階級支配のための機関としてしか映じないはずであった。それが昭和九年代、日本がファシズム的侵略の急先鋒となった頃には、「日本の国情においては資本主義打倒の社会改革において、軍隊と無産階級の合理的結合を必然的ならしめている」と書き、「ファッショまがいの統一的な服装をつけた中央青年隊の結成をおこなった」社会ファシストと化していたのである。ナチズムに感激した彼は、日華戦争一周年の昭和十三年七月七日には、中央青年隊の行進をおこなって近衛内閣を激励し、近衛の新体制のなかに自分の夢を托した。そればかりか、昭和十四年には彼は、超国家主義的右翼団体である中野正剛の東方会と社会大衆党との合同問題を提案している。これは失敗に帰したけれども、要するにここにあるものはただ、

「理論なき虚無主義者」麻生久の姿であった。

＊　＊　＊　＊

本書は、日本社会民主主義運動の指導的な人物として、大正から昭和にかけて活躍し、数奇な生涯を辿った麻生久のきわめて包括的な伝記である。資料的な面で、非常に重要なものとなろうし、また叙述において、つとめて客観性を保持すべく努力している点に敬意を表する。しかしながら、本書の一大欠点は、過去の社会民主主義運動の失敗と錯誤を率直に反省することなく、ともすればこれを正当視し美化しようとする傾向がみられることである。本書は何のために書かれたのであろうか。もしたんなる追憶のためであるとすれば、それでもよいかもしれない。しかし「階級政党か国民政党か」という議論が喧しく叫ばれる今日、この書が現われた意義は、一個人の伝記としてより以上に、日本社会党の将来のあり方にたいして、かつての社会大衆党の運命が示唆するところのものを、深刻に検討し、反省するところにあるのではないだろうか。率直に云って、筆者は、本書が、いまは日本社会党の幹部で、戦前からの無産階級運動の闘士であった方々によって書かれ、帝国主義とファシズムと闘った尊い経験をもっておられる方々によってまとめられながら、本書に分析的な批判と反省の精神があまりにも稀薄であることを指摘しないわけにはゆかない。この点を別とすれば、本書が日本社会運動の一断面を描いたユニークな労作であることは云うまでもない。

（麻生久伝刊行委員会、定価千円）　（飯田　鼎）

ハンス・ヴィルグラー著

## 『古典学派批判者としてのマルサス』

（Dr. Hans Würgler; Malthus als Kritiker der Klassik. Ein Beitrag zur Geschichte der klassischen Wirtschaftstheorie, Winterthur, 1957.）

マルサスの「人口論」については、実に多くのことが語られてきたのに、その「経済学原理」は、人口論の圧倒的な影響のかげにかくれて、ほとんどかえりみられることがなかった。同じ著者の手になる重要な二著が、かくも異なった待遇を受けたことは奇妙な対称をなすが、この長い忘却の淵から「原理」を救い上げたものが、マルクスとケインズであったということは、一層興味深い事実である。

もちろんマルクスは、マルサスの地主的、弁護論的、反動的性格を攻撃し、その皮相的な、非科学的な方法論、流通主義、資本と商品の混同などを非難した。だが同時に、マルサスの「ある程度の理論的せんさく心」を認め、剰余価値説との関連における支配労働価値説の積極面を見出し、一般的過剰生産の可能性を強調して「ブルジョア的生産の諸矛盾を暴露することに関心をもった」点を正当に評価している（「剰余価値学説史」第三巻参照）。



これに対してケインズは、マルサスを「ケンブリッジ学派経済学者の最初の人」とし、「もしもリカードゥの代りに、マルサスが一九世紀の経済学の源流であったならば、今日世界はどれほどより賢明な、より富める場所となっていたことであろうか！」と賞讃の言葉を贈っている（「伝記小論集」参照）。彼は方法論においても、有効需要論においても、マルサスと似たものをもち、マルサスを自説の先駆者と信じていた。両者の相似は、単なる偶然ではなく、両説の生れた社会的状況、両者の階級関係の相関性などを考える時、興味ある問題となろう。

＊　＊　＊　＊

ここに紹介するヴィルグラーの著作は、マルクス、ケインズ双方の説を批判し、マルサス経済理論の研究に独自の見解を示そうとするもので、次ぎのような構成をとっている。

第一部　社会経済学における古典の概念
　1　学史の一般問題の考察
　2　古典の概念の起原
　3　古典時代の現代的把握
　4　古典派、古典派体系についてのわれわれの見解
第二部　古典派体系の基礎に対するマルサスの説
　Ⅰ　価格理論
　　5　価値、価格の定義
　　6　財の価格形成
　　7　価格決定
　　(1)　需要の強さ
　　(2)　生産費の役割
　　8　生産要素の価格形成
　Ⅱ　〃セー法則〃論争
　　9　セーの〃販路法則〃
　　10　〃セー法則〃の解釈
　　(1)　一般均衡傾向の主張としての〃セー法則〃
　　(2)　貯蓄―投資均衡の主張としての〃セー法則〃
　　(3)　経済発展のヴィジョンの表現としての〃セー法則〃
　　11　〃販路説〃に対するマルサスの批判
　Ⅲ　批判的見解の結合と評価
　　12　価値と富の定義について
　　13　富の増大
第三部　学史におけるマルサスの位置
　14　マルサスの位置の変遷
　15　マルサスの経済理論の特色

著者は「マルサスの経済理論」の研究において、彼を古典学派の批判者、新しい理論体系の創造者と考え、そのために古典派体系の基礎、特に〃セー法則〃の理解を求める。

【第一部】古典学派については今日次ぎの四つの主要な解釈がある。